診療科目 ● 小児科学

小児科　専門研修コース

プログラム責任者：伊藤 秀一

附属病院	
教授	伊藤 秀一（小児科部長、発生生育小児医療学主任教授）
病院教授	西巻 滋
准教授、講師	鉾碕 竜範
助教	梶原 良介、藤田 秀次郎、柳町 昌克、原 良紀、中野 裕介、田野島 玲大、野澤　智
附属市民総合医療センター	
准教授、講師	志賀 健太郎（小児総合医療センター部長）、関 和男（母子医療センター部長）、岩崎 志穂
助教	武下 草生子、石田 史彦、町田 裕之、稲葉 彩、渡辺 好宏

本プログラムの特徴

日本小児科学会専門医の資格取得のために必要な研修期間は初期研修を含めて５年間とされていますが、横浜市立大学医学部小児科では入局後の３年間を小児科専門研修期間（後期研修期間）と設定しています。この３年間に小児科専門医として必要な疾患の考え方や診察手技の取得を目指します。

小児医療の幅は広く、予防接種や健康診断など健常児の管理から、新生児未熟児医療、白血病、先天性心疾患などの集中治療を要する高次医療に及んでいます。このため、これからの若手の教育体制をしっかりと整え有意義な仕事をして頂くために、原則として後期研修の３年間で小児科専門医の資格取得に必要な症例を大学および協力病院において経験して頂き，その上で他施設との協力を得て各自の興味のある専門分野を深く研修する機会を設けます。本研修の特徴は小児科協力病院での小児科一般疾患診療と大学附属病院または市民総合医療センターでの各種小児専門疾患診療の研修を研修期間中に期間を設け行うことにあります。

目　　標

小児科専門医として必要な健常児の検診から一般疾患の対処、そして専門分野の研修をすることによって、オールラウンドに対応できる小児科医の知識技量を持つ小児科医の育成を目標としています。

小児科一般として、予防接種・健康診断などの小児保健、肺炎など一般小児疾患の診察と初期治療が行いうる知識と技量を身に付け、日本小児科学会専門医の資格を取得することにあります。

目標とする学会認定専門資格

日本小児科学会専門医

主な協力病院

横浜医療センター、横浜南共済病院、済生会横浜市南部病院、横浜労災病院、済生会横浜市東部病院、みなと赤十字病院、小田原市立病院、藤沢市民病院、大和市立病院、横須賀共済病院

診療科のホームページ URL	担当者・連絡先
http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~shonika/	鉾碕 竜範・6122 E-mail：thokosaki@hotmail.com TEL：045-787-2670 http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~shonika/

診療科の実績

附属病院では、主に血液疾患、循環器疾患、リウマチ免疫疾患・結核、未熟児の入院治療ならびに外来診療を行っています。血液疾患では、末梢血幹細胞移植を悪性疾患のみならず先天性免疫不全症に対しても行う我が国では数少ない病院です。循環器では先天性心疾患に対するカテーテル検査や内科的治療とともに心臓外科と共同した診療を行っています。リウマチ免疫疾患では全国に数少ない専門診療施設として全国の患者の受け入れとともに生物学的製剤などの臨床試験を積極的に行っています。

市民総合医療センターでは、神経疾患、腎臓疾患、内分泌代謝疾患、アレルギー疾患の専門治療と重症肺炎や脳炎などの集中治療の必要な疾患に対する治療を行っています。神経疾患では各種脳炎・脳症に対する脳低体温療法や脳性麻痺に対するボトックスス治療などを行っています。腎疾患では、急性腎不全症例に対する血液浄化療法などを積極的に行っています。内分泌代謝疾患では糖尿病に対する治療・指導を積極的に行っています。

指導医から一言

小児科は、生まれたばかりの新生児から思春期までの年齢を対象としています。体の大きさでいうと3kg以下の小さな体から成人と同じ 50kg 超の約 20 倍の体重差のある患者さんの診療を行っています。小児の特徴はこのような身体的な変化だけではなく、言葉や心の発達も重要な特徴です。これらは「発達」と「発育」として小児科診療の上で最も重要な柱と言えます。

この「発達」と「発育」は、健康なこどもだけではなく、病気を持ったこどもにも程度の差はありますが皆に認めます。この変化はとてもダイナミックなものです。この変化を実感できることは小児科の醍醐味の一つだと思っています。一方、不本意にも病気を持ってしまい入院したこどもの診療も我々小児科医は行っています。病気との闘いの他に、入院という家族からの隔離や採血などの検査などによって少なからずストレスを感じていると思います。さらに同じストレスを患者だけではなく家族もまた感じていると思います。このようなこどもたちと家族に寄り添いまた同じ視線で治療を、看護師、保育士や教師などスタッフと一緒にチーム医療として行っていくことができる小児科医療を目指しています。なによりも元気になって退院する時のこどもの素敵な表情は、小児科医にとってすべての苦労を忘れさせてくれる良薬です。小児に興味をもった先生と一緒に小児科診療を、「笑顔」で「楽しく」やっていきたいと思っています。よろしくお願いします。　（小児科、梶原 良介）

シニアレジデントからのメッセージ

小児科専門研修コース２年目の雪澤といいます。入局１年目は小田原市立病院で、２年目は附属病院で研修をしています。当院の小児科専門研修コースを選んだ理由としては、３年間で一般診療も専門診療もバランスよく経験ができること、症例数の豊富な協力病院を数多く持っていること、協力病院のスタッフの数が多いことが挙げられます。

当コースは協力病院で２年半、大学病院で半年というプログラムで、１年目は協力病院での一般診療で common disease を診ることから始まります。

私は、１年目は小田原市立病院で小児病棟 10 か月、NICU2 か月の研修を行いました。小児病棟では喘息や肺炎、急性胃腸炎や熱性けいれんなど小児科なら必ず診るような疾患から、集中治療を要する重症な疾患まで。NICU では正常新生児から低出生体重児を中心に診させていただきました。小田原市を含む県西地区小児医療の数少ない基幹病院である市立病院には、毎日様々な疾患が集まり、総合してバランスよくいろいろな症例を経験させて頂いたと思います。指導医の先生方も非常に指導熱心で、けいれん重責や意識障害の対応、ネフローゼや腎炎などの小児腎疾患の治療、先天性心疾患児の診断・初期対応、糖尿病、低 Ca 血症など内分泌疾患の診断・治療などなど、各専門グループの先生方から１年間の間だけでも非常に多くのことを経験・勉強させていただきました。学年の近い後期研修医も６人配属され、先輩・同期お互いに刺激を受け、励ましあいながら切磋琢磨することが出来た事も１年目の自分にとって本当に恵まれた環境であったと感じます。

２年目は附属病院またはセンター病院の専門グループで研修します。当院は多くの専門グループがあり、必ず興味のある専門研修が出来ると思います。私はその中で血液腫瘍グループ、循環器グループを選択し、３か月ずつ研修をしています。協力病院では診ることの出来ない疾患が多く、勉強の日々ですがとてもやりがいを感じます。特に１年目で一般小児診療の土台がある中での専門研修のため、より理解も進みますし、今後の自分の専門分野を決める上でもこの時期に専門研修が出来ることは非常にプラスになると思います。

まだ後期研修の半ばですが、充実した日々を過ごしています。小児科経験の多い人も少ない人も、専門分野が決まっている人も決まっていない人も必ず有意義な３年間になると思います。　（平成 23 年卒業　卒後４年目　雪澤 緑）